
最弱宰相は奔走する

方位磁針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱宰相は奔走する

【コード】

N9900Y

【作者名】

方位磁針

【あらすじ】

主人公の性格は『明るい』・『強気』・『元気』というのが王道の中、『ビビリ』・『弱虫』・『すぐ泣く』魔族の少女が主人公。周りの魔族から馬鹿にされまくりな、彼女です。一応、宰相してます。でも、嫌われています。『最強』なはずなのに、この性格で上手くその要素を活かしきれません。そんな時、魔王様が人間を滅ぼす、だなんて言ってきました。大切な人を守るため、チキンながらも精一杯止めたいと思います。だがしかし、やっぱり怖い！！そんな宰相が奔走するお話です。

？（前書き）

よろしくお願ひします。

？

ここは、ビフレスト。魔族が治めるアールヴヘイムの隣にある。ここを治める伯爵の敷地で二人の少年少女が戯れていた。

「エドマンドー！私と遊びやがれー」

「うわっ、ラナ！お前また来たのかよ」

肩くらいの黒い髪をなびかせ、16・17歳の少女が、やはり同じ年頃の金髪の少年に駆け寄る。そして、少年の背中に飛び乗るようにして、身体ごとぶつかつた。そんな少女に、少年は嫌そうな顔をしながらも、ちゃんと受け止める。そんな少年の心遣いがまた嬉しいらしく、背中におぶさつたまま少女はまた笑つた。

「へへ、今日はアリーがアップルパイを焼くと言っていたからね！
」！

「なんで、ただ食いにくるお前に、感謝しなきゃならん！」

「私は魔国の宰相だよー！？うやまえーうやまえー」

ラナと呼ばれた少女は、エドマンドという少年の背中から降り、彼の正面に立つ。ふふん、と自慢そうに胸を張つた。だが、エドマンドは、ラナを胡散臭そうに見る。そして、嫌味たっぷりな笑みを浮かべた。

「ったく。今日のお勉強はどうしたのですか、宰相殿？」

「うっ！それはー、ええとー」
エドマンズの質問にラナが視線を泳がせていると、鈴をころがすよ
うな笑い声がした。

「ふふ、またお勉強抜け出してきたんでしょう？ダメよー、またユ
ピテルさんが困ってしまうわ」

「アリーー！！」

20歳位の金色の長い髪を上品に結っている女性が、お盆を持って
ラナとエドマンズに近寄る。彼らを見つめると、碧眼の瞳を、優し
く細めた。焼きたてなのだろう。お盆には香ばしい匂いをさせたア
ップルパイが、乗ってある。

「わーい、アリーのアップルパイだー！」

「そんなに喜んでもらえて、嬉しいわ。さあ、召し上がれ？」

エドマンズは、アップルパイに飛びつくラナを、呆れたように見た。
そして、諦めたようにため息をつく。ラナは切り分けられ、皿にの
ったアップルパイを嬉々としてアリーから受け取る。

「姉さん、そんなにラナを甘やかしちゃだめだよ」

「あら？そんなつもりは無かったんだけど……。ラナちゃんが可
愛いから、そうなっちゃうのかしら」

アリーは頬に手を当てた。ラナと目が合うと、ふんわりと微笑む。

「えへへへへー」

ラナは照れたように、頬を赤めた。

アリーはとっても心根の優しい女性だ。弟のエドモンドと同様光沢を放つ金髪をなびかせ、おだやかにいつも笑っているアリーは、ラナの憧れだ。ラナはいつかこんな女性になりたいと思っていたし、こんなお姉ちゃんが欲しいなーとも考えていた。

「……『可愛い』ねえ？」

エドモンドは、ジロジロとラナを見てくる。何か言いたげな視線に、アップルパイにかぶり付いていたラナは、ムツとした。

「何だよ、その目」

「いやー？ただ、もう少し乙女らしい行動ができんのかなーと思いまして」

「なにさー！」

ムキーと手を振り上げて怒るラナを見て、エドモンドがニヤニヤと笑う。そんな二人の攻防戦をアリーが「まあまあ」と言いながらも、おだやかに見守る。

こんな、暖かいこの空気がラナは大好きだ。

魔国では、こんなことは無いから。

「ラナ様~~~~~！！探しましたよ！また、こんなところに居たのですか」

そう言つて、ほんわかした空気に飛び込んできたのは、白く小さい姿をした竜。黒いつぶらな瞳は、今は怒つたように細められている。竜の姿をみると、ラナは隠さずに嫌そうな顔をした。

「げっ！もう来たの？」

「『げっ』とは何ですか！久しぶりに『私がお茶を入れてあげる、ユピテル』と可愛く言つて下さったから、感動しむせび泣きながら飲んだのに！痺れ薬を入れたでしょ！ラナ様！！ユピテルは悲しゅうございます！」

「そつだつけ？」

小さな瞳から、涙を滂沱と流す竜。いつものことなので、ラナは軽く無視をして構わずアップルパイを口に放り込んだ。ユピテルは、ラナのお目付け役である。だが、事あるごとに五月蠅いので、ラナはよく煙たがっていた。

「ラナ様 ！！！！」

「うるさいなあ」

「うつ、うつ、ユピテルめは、ユピテルめは、ラナ様に立派な宰相になつていただきたい、と日々願っているのです。なのに、なのに、お勉強サボるなんてー！！！！！！」

「勉強嫌い」

「そんなこと言わずに!」

「イ・ヤ」

「そんな〜」

ユピテルは、パタパタと羽を忙しく動かして、ラナの周りを飛び回った。なんとか、主人を勉強させようと必死なのだ。だが、ラナはそんな彼など知るもんか、とばかりの態度だ。

さすがにラナにまったく相手にされないユピテルが不憫に思ったのか、エドモンドは仕方なしにラナを説得してきた。

「おい、ラナ。今日はそのアップルパイ食べたら、帰れよ?俺もこのあと学びがあるしな」

「えーーーー!?」

「ラナちゃん、その残りのアップルパイお土産に包んであげるわ」

「本当?ありがとう!」

ラナは不服そうにしたが、アリーの言葉に顔を輝かせる。

何となく、二人に丸め込まれてしまった感じはする。もう少しここに居たかったが、二人にそう言われたならしょうがない。ラナは食べていたアップルパイをほお張り、帰る準備をした。

「ちえ！もつと遊びたかったのに〜」

ラナは、ユピテルにぶら下がりながら、毒づいた。30センチ程の大きさの竜のユピテルだが、魔族であるため以外に力持ちだ。ラナをこうして脚につかまらせ跳ぶのは朝飯まえなのだ。ラナとユピテルは己の領にある城に帰るべく、空をぶかぶかと飛んでいた。

「まだ、そんなことを言う。しっかりとアップルパイ貰ってきたのですから、良いではありませんか」

ラナの腕の中には、しっかりと貰ったアップルパイの包みが抱えられていた。ちゃっかりとほとんどのアップルパイを持ち帰るラナを、ユピテルは呆れた様に見た。しかし、ラナは不完全燃焼のようで、口を尖らせる。

「アップルパイ食べて、遊びたかったの！最近あんまりエドモンド構ってくれないし・・・」

「まあ、彼も伯爵の子ですからね、いろいろ忙しくなっているのでしょう」

「ブーーーー」

「それに、ラナ様だって、本当は宰相のお勉強しなくてはいけないんですよ！」

「うぐっっ！」

「いい機会です。エドモンドも伯爵の息子として頑張っているのですから、ラナ様も見習いなさい」

「ぶぐう」

また始まったユピテルのお説教に、ラナはほっぺを膨らませた。ユピテルの説教は始まると、長いのだ。しかも、今はユピテルの脚につかまって飛んでいるので、どこへも逃げようが無い。ラナはくどくどと展開する説教を首をすくめて、聞くしかなかった。

説教が終わると、ラナは安堵のため息をつく。ユピテルは満足したように、羽を動かした。ラナは彼に元気を奪われた心地だ。己の城が見えてきて、視線が自然と城へ向かう。

ユピテルはそんなラナを気まずげに見た。一瞬ためらうようにした後、重々しく口を開く。

「・・・それと、ラナ様。明日は魔国で会議があります。朝一番で出かけるので、準備してくださいね？」

先ほどのお説教口調をあらためて、ユピテルは静かに話した。視線は城がある方向を向いているが、ラナを気にしている気配が伺えた。

「分かった」

ラナも神妙に頷いた。やはり、視線は城に向いたままだ。ユピテルがどうして口調をあらためて、ラナに明日のことを伝えたのか、分かっているからだ。

宰相であるラナは、当然魔国の会議に出席することになる。だけど、ラナの存在は無に等しいものであり、嘲笑の的だからだ。

何故なら、ラナは『最弱宰相』なのだから

?

「 ということで、アリカヤの地にいる魔族の統制は、4武将の一人クロノスに任せることにする。異論は無いな?」

それだけで存在感がある紅の長い髪と瞳を持つ、魔王は今回の会議で決まったことを述べた。魔王の名はソル。伝説の存在となっっている『白い恐怖』とも呼ばれた先代の魔王の地位を受け継いだ豪傑だ。彼は、カリスマ性に溢れ魔王の地位に納まると、先代の魔王が居なくなり統制がとれなかつた魔族を一気にまとめてしまった。もはや、魔族らの絶対的な存在である。いけません、王という気質のせいかな傲慢な態度が目立つが、それもまた彼の魅力と、彼を慕う魔族は多い。

「カイルス、お前はどうか?」

「意義ありません」

「ヴィクトリア、お前は?」

「ありませんわ」

「デイス」

「ないですよ」

順々に、会議に集まった者たちに王が、異議がないか確認していく。ラナは、いつ魔王様が自分に確認してくるか、待った。

「クラブ、お前は？」

「皆さん、同様にありません」

「そうか。では、全員異議なしということで、今回の議題は終わりとする」

従順に返事をする部下たち。ソルは、満足そうに頷いた。

(・・・うん。私確認されなかったよね？飛ばされたよね？全員異議なしじゃないから、一人異議なしかどうか聞かれてない人いますからっ！！)

己の名前を呼ばれなかったことに戸惑うラナが魔王様を見ていると、くすくすと忍び笑いが聞こえた。そこで初めて、このことがわざとされたことだと、気付く。思わず、笑い声がした方向を見ると、四武将の一人であるヴィクトリアが扇で口元を隠している。目が合うと、馬鹿にした笑みを浮かべてきた。

(あー、またか)

ラナは目を伏せた。

このようなことは初めてではない。一応、ラナは宰相という地位にいるが、魔族のほとんどがラナに敬意なんてはらうことなんてないし、認めていない。宰相という地位は代々ラナの一族が受けついできたが、もはやその中身は伴っていないのだ。

だから、『最弱宰相』と呼ばれ、馬鹿にされている。裏でこそそこそと悪口なんて言われぬ。もはや堂々とラナを目の前にして、悪口を言ってくるレベルだ。

この原因は、ラナの家系、スヴァルト・アールヴヘイムにある。ラナの先祖はもともと人間に親善派なのだ。何かと、魔族が人間を滅ぼそうとするたびに、阻止してきた。そんなラナたちの存在は、人間を家畜並みに考える魔族たちにとっては、目の上のたんこぶのような存在なのだ。

そして、もう一つの原因はラナの性格だ。

何を隠そう、ラナはとてもビビリな性格なのである。力がすべての魔族の中で、チキン丸出して魔力も微弱にしかないラナは、魔族たちにとって嘲笑の的だった。

宰相という肩書きは立派なラナは、魔族たちにとって汚点のような扱いをされている。

実際今も魔王ソルは何気ない顔をして、ラナを無視し続けていた。無言のラナへの制裁なのだろう。彼からはラナを毛嫌いしているのが、いつも感じられた。何かとラナを排除しようとしてきた。暴力的なことをするわけではないが、ちくちくとした嫌がらせを仕向けてくるのだ。おそらく、ラナが自主的に宰相の地位を降りることを望んでいるのだろう。

「よし、会議は終了だ」

ソルの一声が、解散を告げる。ラナは強張った肩を降ろす。とりあえず、絶えず嘲笑される苦痛から解放たれるのだ。各々が立ち上がり、己の仕事場へと向かう。ラナものろろとした動きで、椅子から立ち上がる。ユピテルが待合室で待機している。待合室に行つて、ユピテルとさつさと己の家に帰りたい。

今日の会議もすっかりと、馬鹿にされたラナは、トボトボと会議室から出た。

「ラナ様」

ドアを出て気を抜いた瞬間に、誰かに声を背中越しにかけられる。思わず、びくりと身体がふるえた。呼び止めた相手を見るべく、恐る恐る振り返る。本能では、見るな、と叫んでいた。呼び止めた声の持ち主は、何となく予想がついていた。それが的中していれば、ラナにとってその者は、特に苦手とする相手のはずだ。嫌々後ろを振り返ると、灰色の髪の温和な笑みを浮かべる美しい青年が立っていた。

「ラナ殿、本日の会議はあまり元気がないようでしたが、どうかしましたか？」

そう心配そうに聞いてくる奴は、四武将のデイスだ。四武将とは、魔族の中でもひと際強い4名の武将の総称である。特に、目の前にいるデイスは、温和な見た目とは逆に残忍な性格として知られる。

言葉だけ見ると、とてもいい奴に感じるかもしれないが、騙されてはいけない。よく彼を見ると、灰色の瞳には嘲笑がにじんでおり、口元は歪んだ笑みをつくっている。とても、心配しているとは思えない。

一見、爽やかに笑う美しい青年のようだが、腹の中は真っ黒だ。この青年は何かと、ラナを貶めようとする、油断ならない魔族の青年なのだ。

「い、いえ、大丈夫です。御心配おかけしました」

呟くように、ラナは話した。

理由は簡単。彼が怖いからだ。

見た目がやさしげなのに、放つオーラが禍々しいギャップが、何か秘めていそうで恐ろしい。思わず、びくびくとした態度になってしまう。デイスを正視できなく、下を向く。

「それは、良かった！宰相ともあろうお方に、倒れられたらこの魔国はやっていけませんからね」

（はい、嫌味。会議で何もできない私への嫌味ですね、それ）

清しい笑顔で、言っているが、完全に役に立たないラナへの皮肉だ。そのことをちくちくと責めてくる。直接ではなく遠回しに、丁寧に言ってくるものだから尚始末が悪い。

「そ、それほどでも」

「またまた、ご謙遜を」

二人の話している姿は一見、笑顔な宰相と慇懃な態度の武将の会話かもしれない。だが、宰相のラナは冷や汗を流しながら、デイスは嘲りを口に含ませている。

ドクツドクツ！！

心臓の音が大きく鳴るのが、自分でも分かる。手に汗が滲む。手どころか身体全体がふるえてくるのを、どうしても止められない。手をぎゅっと握るも変わらない。早くここから去りたかった。デイスという恐ろしい存在の近くから、一刻も早く逃げたい。

「っでは、ここで失礼します！」

「はい、また」

早口でラナは、別れの挨拶を言った。思いのほかデイスはあっさりとしてラナを解放する。やっと、ねちねちと攻撃してくるデイスを振り払うことが出来た。ラナはそっとため息をついた。デイスに背中を向ける。そのまま歩き始める。その後ろからデイスの「さようなら、『宰相』様？」という声が聞こえた。

(・・・やっぱり、あいつは苦手だ)

ラナは、唇を噛む。が、何も言い帰さず、トボトボ回廊を歩き始めた。そんなラナをじっとデイスは見ていた。口元を弧に描いて。

？

「なんだ、お前あのへっぴりに興味あるのか？趣味悪いな」

ソルはデイスにニヤニヤと笑いながら、話しかける。紅色の瞳は、獰猛さを宿している。褐色の肌をした屈強な体つきからは、彼の強さがうかがい知れた。少し己より背が高い魔王を見て、デイスは微笑んだ。

「僕、弱いもので遊ぶのが好きなんです。ほら、壊れるか、壊れないかのスリルが楽しいでしょ？」

「そんなもんかねー？俺は強いものを壊した方が、やりがいがあると思うがな」

「ふふつ。まあ、それぞれですから。それに、あの宰相殿は、特に弱い。じわじわと苦しめていくのが、おもしろいのですよ」

デイスはくすくす笑いながら、ラナが歩いた回廊を見た。もう、ラナは見えなくなっていたが、彼には見えるともいうように。灰色の瞳に残虐さをともして。

ラナは、鬱々とした気分を持って余しながら、ゆっくりと回廊を歩いていた。気分は、最悪である。会議ではいつもであるが無視されるし、最後までデイスにからかわれた。

スッ

スラツとした長身に見合う長い足で誰かが、ぽてぽてと歩くラナをすぐに抜かしていった。カイルスだった。ラナを抜かす間際、カイルスと目があつた。アッシュグレーの瞳に映っているのはラナに対しての『無関心』だった。絹のような美しい薄い水色の髪をなびかせ、カイルスはすぐに先に行ってしまった。

氷のような冷たい美貌の彼は、ラナと同じ宰相という地位にいる。この魔国では、宰相は二人いるのだ。彼はラナと同様、宰相という役柄につく一族の者である。ラナと決定的に違うのは、彼がとても優秀であり、魔族たちや魔王の信頼が厚い、という点だろう。

カイルスは、ラナに対してデイス達のようなことは何もしてこない。代わりに、彼はラナ何の関心も抱いていない。というよりも、ラナが存在しないように、徹底的に無視を貫いている。彼にとっては、同じ宰相に就任している役立たずのラナが、見るに耐えられないのだろう。

(愚弄されると、無視されるとどちらが良いのかな)

ラナは、カイルスの遠ざかる背中を見ながら考えた。

「おい、最弱宰相様のお通りだぜ？」

「まったく、早く消えないかな」

「見苦しいったら、ありゃしないわ」

ひたすらユピテルがいる待合室までの回廊を歩いている間、魔族たちの声が聞こえる。途中すれ違う魔族たちは、ラナへの蔑みの視線を隠そうともしない。普通、宰相という地位に居る者ならば、お辞儀の一つもするはずだろうが、それもない。ただ、小声でラナをせせら笑う。

ラナは、下向きに歩いた。エドモンドやアリーに会いたい。あの温かな空気の中に早く行きたい。ぼんやりと思いつながら。

(早く、帰りたい)

ラナは早歩きになるのを、止められなかった。待合室が見えてくる。待合室のドアを開くと、ユピテルが心配そうにしながら待っていた。せわしなく部屋の中を飛び回っている。ドアを開けたラナを見ると、ユピテルはびきつと固まった。羽ばたきまで止まったので、とすん、床に小さな身体が落ちこちる。だが、視線はラナに向けたままだ。ラナの顔色があまり良くないのを見て、何があったのか察したようだ。

「ラナ様・・・」

「ユピテル、帰ろう。会議は終わったよ」

ラナはユピテルの言葉をさえぎった。こんなものいつものことだ。皆

に馬鹿にされることは、なんてことはない。
笑顔を作って、ユピテルを見たが、上手くできていない気がする。

「はい」

何か言いたそうな顔したが、ユピテルは何も言わずに頷いた。

待合室を出て、城の屋外に出る。そこを守っていた兵士たちが、意味深にラナを眺めてくるも何も言わなかった。飛んでいたユピテルが、振り返りラナにつかまって、とばかりに脚を出す。ラナはユピテルの脚をつかんだ。ふわり、とラナの身体が浮く。そのまま上昇していく。感じるのは、風と冷やかな視線。ラナは無言で城を離れた。

魔国を離れ、1時間ほどがたった。ラナたちはまだ飛んでいた。もう、時刻は夕方、目の前には赤い夕焼けが広がっている。ユピテルは明るい声で、ラナにひっきりなしに話しかけた。

「今日の夕食は、タイロンが腕によりをかけたビーフステーキだそうです。デザートはチョコプレートケーキですって。きっと、美味しいですよ！」

「うん」

「シェリーが夜にトランプゲームをしよう、と言っていました。私とフリックも混ぜります。楽しみですねー！」

「うん」

「あ、明日は午前だけのお勉強にして、午後はピクニックに行きましよう！今日は頑張りましたから、御褒美です」

「うん」

ラナは、魔族たちの自分の扱いにへこみ、他のことはあまり考えられない。ぼんやりと返事をする。ユピテルは、ラナを元氣付けるのを諦めたのか、黙り込む。そして、ポツリと話す。

「・・・ラナ様、夕焼けがとても綺麗ですね。きっと、明日はいいことがありますよ？」

ユピテルは眩しそうに、目の前の夕焼けを見た。ラナもつられて、まじまじと夕焼けをみる。

広大な空の下には、大草原が広がっている。太陽はこれから沈むというのに、なんだか日中には無い力強さが感じられた。まだまだ、これからだ、とでも言うように。

「そうだね」

ラナはそっと目を閉じた。目を閉じても、真っ赤な夕焼けが強く強

く感じられた。まるで、ラナに『これからだ』と元氣付けるように。

？

宰相であるラナの朝は、早い。ラナは本当はもっと寝ていたいのだが、周りがそうは問屋がおろさない。

「ラナ様〜〜〜〜！！朝です、起きてくださいな！」

そう言っつて、ラナにかけられた毛布を剥ぎ取ってきたのは、メイドのシェリーだ。カールした亜麻色の髪をひとつにくくり、ほんきゅっぽんな体系は、実に羨ましいとラナは思う。

陶器のような白い肌に、少すつりあがったアーモンド形のエメラルドグリーン瞳の彼女、どこからどう見ても、美女だ。

だが、色っぽい見た目に反して、中身は男らしい性格だったりする。

「うーあと、5時間・・・」

「そんなに寝て、どうするんですか！さあさ、早くベットから出てください。シャツが洗えないでしょ？」

「むー」

ラナは、目をこすりながら、緩慢な動作で起きた。

「早いよう、シェリー」

「いつもの起きる時間ですよ。また、昨日夜更かししてたでしょう？お部屋から光が夜遅くまで漏れていたのは、知っていますよ！？」

そう言っつて、腰に手を当てて怒るシェリー。胸をはる姿勢になるの

で、自然と大きい胸が誇張される。

「えいつ！」

堪らずポスンと音をたてて、ラナはシェリーの豊満な胸に顔を埋めた。

(うっん。いい匂いと柔らかな感触が、たまらない！)

ラナはそういう趣味はない。ただ、彼女の魅力的な胸は、誰だって触りたいと思うはず！とラナは言い訳をしている。

時々、シェリーに抱きついたりしているが、シェリーは構わずラナをぶら下げたまま掃除や洗濯などのメイドとしての仕事を着々とこなす。小柄なラナは、コアラのように彼女にひつつくのが好きだ。小さい時から、母はよく放浪の旅に出て行ってしまっているので、寂しい時はシェリーに温もりを求めたものだ。彼女はラナにとって、母や姉のような存在でもある。

以前ラナはこのことをエドモンドに話したところ、彼は非常に羨ましがっていた。

今日も、胸にラナの顔をうもれさせたままシェリーは、構わずシートなどをはがし、洗濯籠に入れた。そのまま張り付くラナを洗面所に連れて行き、ラナの身支度をさっさとさせてしまった。いろいろ見事なメイドだ。

シェリーにせつつかれてダイニングルームに行くと、既にユピテル

とコックのタイロンが待つていた。強面でかつ牛のような角を頭から生やし、巨大な体躯を持つ彼だが、作る料理は見た目も味も繊細なのだから、世の中不思議である。

「ラナ様、本日の朝食はラナ様のお好きなスクランブルエッグやスコーン、野菜スープにデザートはいちごですよ」

そう言うタイロンの笑みは、どう見ても凶悪犯罪者が悪業を思いついた時の笑みにしか見えない。実際は、一番涙もろい優しい性格なのだから、不憫な奴だとラナは思う。

「はい」

ラナは、席についた。

「いただきます」

食事の挨拶を元気にして、ラナはさっそく食事にありついた。

「おいしー!!」

タイロンのつくる料理はとても、美味しい。アリーも料理上手だが、やはりタイロンが一番上手だ。アップルパイはアリーの作ったのが、ダントツだが。

幸せそうに食べるラナをこの城に仕える魔族たちは、暖かく見てくれている。エドモンド達も好きだけど、ラナはこの城の皆も大好きなのだ。

「ラナ様、本日は宰相としての礼儀作法を学びますからね？」

「はい」

勉強は嫌だが、朝食がおいしいので良しとしよう。ラナは満足げに頷いた。だが、ラナはすっかり忘れていた。ユピテルが施す学びを厳しさを。

「ラナ様、背筋はしっかりと伸ばして！！手先まで意識して！」

ユピテルは、意外に作法には厳しかった。さつきから、細かいミスにまで叱責がとぶ。ラナは、ひーひー言いながら、ユピテルの作法の学びを受けた。少しでも気を抜こうものなら、鞭がとんでくるのだから、ひどい。

(うわーん！鞭が怖いよう！)

ラナは、齒軋りした。だが、ユピテルの持っている鞭が怖いので、逆襲はできない。

ラナが、ユピテルのスパルタレッスンを受けていると、「失礼します」と部屋にフリッグが入ってきた。フリッグは、この城の庭師だ。彼は、おっとりした性格で、とても植物が好きだ。ちなみに彼の専用の庭には珍しい植物がたくさん植えられている。以前ラナが、見に行つて人食い花に襲われて以来、もう絶対近づくものかと、ラナは誓っている。

「ラナ様にお客様です」

いつも穏やかな彼が、今はすこし焦ったような表情だ。それだけで、来たお客というものが良くないものだ、と、分かる。

「ええと、誰が来たの？」

ラナは恐る恐る質問する。そんなラナを気の毒そうに、フリッグは見た。

「四武将のヴィクトリア様とクロノス様です」

「・・・体調が悪いので、会えませんと伝えて」

「ダメです」

逃げようとしたラナの意見をユピテルは、一刀両断した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9900y/>

最弱宰相は奔走する

2011年11月30日18時48分発行